新見公立短期大学紀要　第29巻
pp. 25－31, 2008

原　著

成人看護学実習Ａ終了時における学生－患者間の距離のとり方に関する研究

小野　晴子[1)*]・掛屋　純子[1)]・山縣　由子[1)]・金山　弘代[1)]・逸見　英枝[1)]・住野　好久[2)]

1）看護学科　　2）岡山大学教育学部研究科教授

（2008年11月12日受理）

本研究は，成人看護学実習において学生が持っている患者との距離のとり方に関する意識を明らかにすることによって，実習指導の手がかりを得ることを目的としている。研究方法は，3年次成人看護学実習Ａの終了時に自記式質問紙法を用いた調査とその考察である。

その結果，実習において学生は，患者とのコミュニケーションにおける物理的な距離に関しては，「病室」で「20分前後の時間」「90度法」を用いて患者と「50cm離れて」コミュニケーションを図っていることがわかった。心理的な距離に関しては，患者を「優しかった」と受け止め，「気遣ってくれた」「協力的」」など心理的に接近することができていた。コミュニケーションのとり方に関しては「挨拶・自己紹介」「患者と視線を合わす」「言葉かけ・うなずき」が全員「できた」と答えた。実習期間中に学生が教員・臨床指導者（以下指導者と略す）に求めることは，「困っているときの声かけや助言」「疾患や症状の判断に困ったときの助言」などであった。

学生の感想の中に「４週間の実習のなかで徐々に距離を縮めることができた」「自分も一人になりたいときがあるように患者さんも一人になりたいときがあると思うので，距離を置くことがわかった」という気づきがあった。学生が経験を振り返ることを通して気づいたことを大切にし，学生自らが学びを深めることができる実習指導が必要であることが示唆された。

（キーワード）成人看護学実習Ａ，距離のとり方，対人距離，距離観

はじめに

看護は，人が人にはたらきかける側面を強調する実践領域として位置づけられ，対人関係の技術を基礎とし，患者の疾病や身体的状況だけではなく，感情や意欲も含めた意識全体をも把握し，それらにふさわしい適切な距離を患者との間に保ちながら関わっていく実践であると言うことができる。看護師は，実践の場で把握している情報と，そのときその場の患者の反応を得て，近づいたり離れたりしながら患者との適切な距離をとる。この適切な距離を瞬時瞬時に判断できる専門性（これを「距離観」と言う。）はどの領域における看護にも求められる看護師の基本的力量の一つである[1)]。

看護学生にこのような距離観を形成することは容易なことではない。日常生活の中で他者との関係をもつこともままならない学生が，臨床の現場で患者との関係を築くことは容易ではない。仮に出会ったときよりも距離を縮めることができたとしても，その距離を意図的に離したり，コントロールしたりすることはさらに困難である。成人看護学実習では，これまで十分経験していない自分より年上の患者を対象とするため，関係をつくり，適切な距離をとり，距離観を高めていくことはより困難である。

では，成人看護学実習において学生は患者とどのような距離をとりながら，どのように距離観を発揮しているのか。これらを明らかにすることで，実習指導の改善，実習前の教授活動や教材の再検討，そして距離観形成をカリキュラムに位置づけるための手がかりを得たい。

そこで本研究では，成人看護学実習Ａ終了の段階における学生の距離のとり方の実態を明らかにし，その結果を考察することを通して，実習指導，実習前後の教授活動や教材の改善の手がかりを得ることを目的とした。

Ⅰ．用語の定義

１．対人距離

「対人距離」とは，**人と人が係わり合うときに生ずる近づき具合・離れ具合のことである。両者の空間的な位**

*連絡先：小野晴子　看護学科　新見公立短期大学　718-8585　新見市西方1263-2

置関係などに現われる物理的な対人距離と，両者の感情の変化に現われる心理的な対人感情がある。

2．距離観

「距離観」とは，患者との関係を発展させるとき，看護師自身に内在する思考や判断，行動規範などを包含した看護観であり，患者との間の距離を認識し，判断する根拠である。

類似した言葉として「距離感」がある。「感」とは，「**物事にふれて心を動かすこと。思いが起ること。**」であり，「距離感」とは対人関係において自分と他者との距離を主観的に感じている状態のことである。一方「観」は「**見ること。ながめること。見解。みかた。**」であり，「観ずる」とは「よく観察し思い巡らせて正しく知る，心中に思い浮かべて観察すること」である。つまり「距離観」とは，主観的な感じ方ではなく，対人距離をよく観察して，適切な距離をとろうと思いをめぐらせて思いを巡らせて，距離のとり方を判断する見方・考え方，見解を意味している。

3．成人看護学実習A

「成人看護学実習A」とは，三年次生を対象にして，臨地において成人期及び老年期の健康上の問題をもつ対象の看護実践を通して，看護過程の展開能力と態度を学ぶことを目的とした「成人看護学実習」8単位の前半4単位のことを示す。

Ⅱ．研究目的

成人看護学実習において看護学生の対人距離のとり方に関する看護学生の認識を明らかにし，距離観形成に活かせる教授方法を開発する。

Ⅲ．研究方法

1．研究方法：留め置き法による自記式質問紙調査。
2．調査対象：A短期大学看護学科3年生64名。有効回答は47名（有効回答率73.4%）。
3．調査期間：2008年6月20日～27日
4．調査内容：看護学実習の対人距離に関する「学生の意識」「コミュニケーションの距離」「コミュニケーションのとり方」「学生が希望する教授方法」「成人看護への関心度」をみた。尚，「コミュニケーションのとり方」については，種池[2]らのコミュニケーション過程の距離のとり方に関するチェック項目を参考に、成人看護学実習におけるコミュニケーションの距離のとり方について20項目を設定し質問項目を作成した。
5．分析方法：統計ソフトSPSS 16. J for Windowsによる統計処理を行い、成人看護学への関心度についてはχ^2検定を行なった。また，調査項目を「非常にあてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」の4段階間隔尺度を用いて評価した。尚，集計は「非常にあてはまる」と「ややあてはまる」を「あてはまる」とし，「全くあてはまらない」「あまりあてはまらない」を「あてはまらない」として分析した。また，一部を精神看護学実習終了時の結果[3]と関連づけて比較・考察した。
6．倫理的配慮：看護学科3年次生に研究の主旨と内容を口頭で説明した。研究目的以外には使用しないこと，研究協力は自由意志であること，個人が特定できないよう匿名性を保持した統計処理をすることを説明した。回収は回答箱を用意し，自由に回答ができるようにした。

Ⅳ．結果

1．成人看護学実習Aに対する学生の意識

学生の成人看護学実習に対する意識については，以下の通りであった。

1）成人看護学実習Aが終了するまでに経験した領域は「老年看護学実習」38.3%，「小児看護学実習」31.9%であった。「地域看護学」29.8%，「母性看護学実習」23.4%，「精神看護学実習」21.3%で，全実習の3割程度の実習を経験している段階であった（図1）。

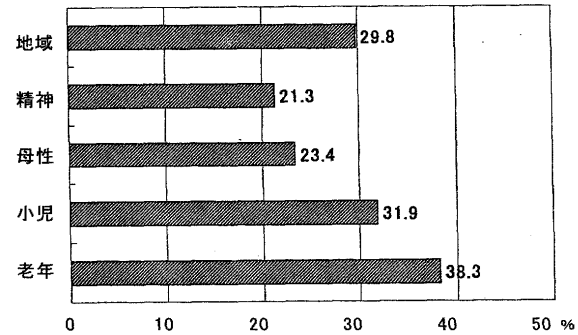

図1　既習実習領域（n＝47）

2）成人看護学実習Aに対する不安については，「非常にある」が44.7%，「まあまあある」が44.7%で，「あまりない」は10.6%であった。したがって「不安がある」と答えた学生は89.4%であった（図2）。

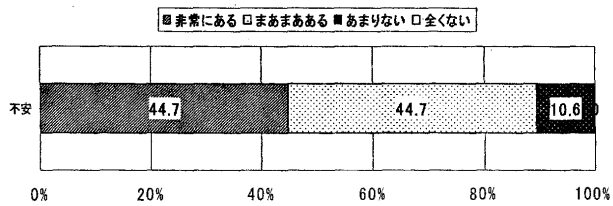

図2　成人看護学実習Aにおける不安度（n＝47）

3）成人看護学実習Aへの興味・関心については，「非常にある」が8.5%，「まあまあある」が74.5%で，「あまりない」が14.9%，「全くない」が2.1%であった。したがって「興味・関心がある」と答えた学生は83.0%であった（図3）。

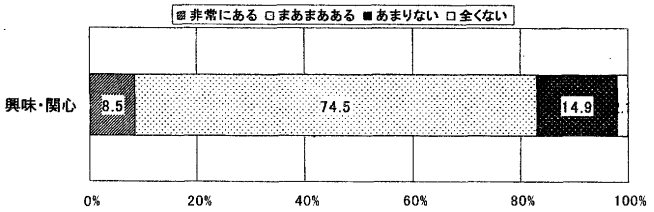

図3　成人看護学実習Aにむけての興味・関心度（n＝47）

4）成人看護学実習Aの印象は，「非常によかった」が44.7%，「まあまあよかった」が55.3%で，印象が「あまりよくない」と「悪かった」はいなかった。「よかった」と答えた学生は100%で全員がよい印象を得ていた（図4）。

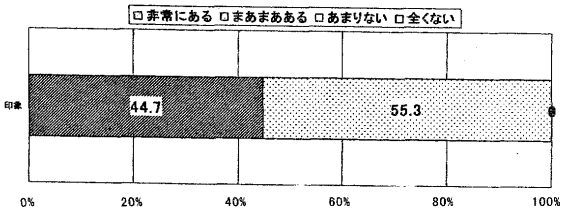

図4　成人看護学実習Aにむけての印象度（n＝47）

2．コミュニケーションの対人距離

1）物理的距離について

①位置関係では，「90度法」が74.5%と最も多く，次いで「45度法」で21.3%，「対面法」と「並行法」が2.1%であった（図5）。

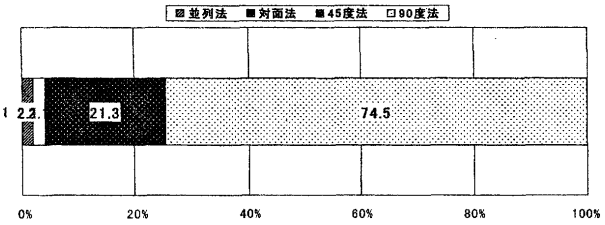

図5　患者とのコミュニケーションの位置関係（n＝47）

②患者との距離では，「50cm離れて」が70.2%と答えた。次いで多かったのが「1m離れて」で17%，「20cm離れて」が10.7%，「接触して」は2.1%であった。

③1回の会話時間では「20分」が42.6%で最も多く，次いで「30分」で31.9%，「10分未満」が14.9%「30分以上」が10.6%であった。

④場所を見ると「病室」が91%で大半を占め，「ホール（面談室）」4.5%，「散歩中」4.5%であった。

⑤周辺の環境については，「2人で会話」と「非言語的コミュニケーション」が29.5%で同率だった。次いで「一方的」15.9%，「患者の負担にならない」13.7%，「家族を交えて」11.4%であった。

2）心理的距離について

①患者との関係の質で，最も多かったのが「優しかった」63.8%，「気づかってくれた」59.6%，「協力的」59.6%と同率であった。続いて「励ましてくれた」42.6%であった。

②対人距離がとれなかったことについて最も多かったのが「拒否された」23.4%，「怖かった」10.6%，「怒られた」6.4%，「辛かった」4.3%，「ボディータッチを受けた」4.3%であった。

③困った対応として，「言葉がわかりにくい」が36.2%で，次いで「気をつかった」36.2%で同率であった。「うまく話せなかった」も14.9%あった。「症状の判断に迷った」は8.5%となっていた（図6）。

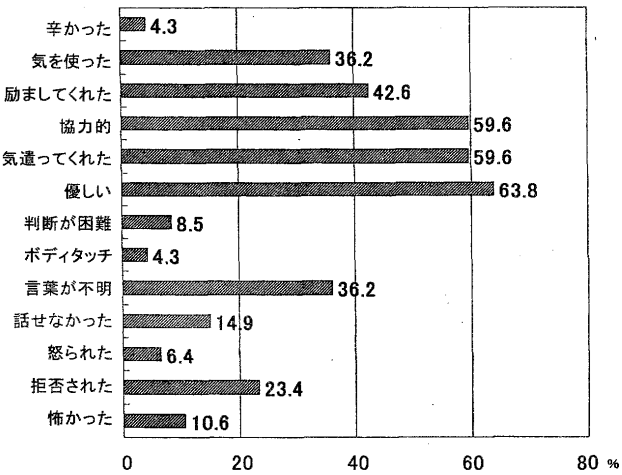

図6　患者への対応（n＝47）

3．患者との対応で指導者に望むこと

成人看護学実習において患者との対応で指導者に望むことについては，「困っているときの声かけや助言」で，76.6%であった。次いで「症状の判断に迷った時の助言」74.5%，「具体的な対応への助言」61.7%，「カンファレンスでの助言」55.3%，「患者の情報提供」48.6%，「スタッ

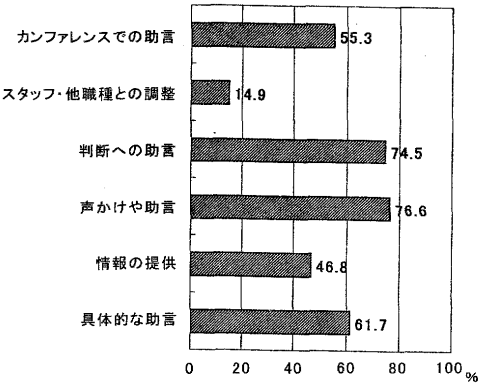

図7　指導者に望むこと（n＝47）

フ・他職種との調整」14.9%の順となっていた（図７）。

４．コミュニケーション過程における距離のとり方

成人看護学実習におけるコミュニケーション過程における距離のとり方について、「よくできた」と「まあまあできた」を合わせてみてみると，「挨拶・自己紹介」100%，「患者の確認」97.9%，「視線を合わす」100%，「言葉かけ・うなずき」が100%で4項目とも9割を超えほぼ100%であった。次に，「説明を理解してもらった」が80.8%，「意思疎通ができた」が78.7%，「わかりやすく説明」が70.2%と8割から7割が3項目あった。続いて6割が「テンポを合わせる」68.1%と「患者の情報収集」63.8%の2項目であった。あとの項目「心理的問題をアセスメント」59.6%と「自己決定を支える」が59.6%と同率で，「コンタクトの了解」が57.4%，「不安を聞く」が55.4%，「患者が主導」と「共に考える」が53.2%で同率であった。「オウム返し」が51%，「社会的問題をアセスメント」が50%で5割が８項目あった。4割の内訳は「気持ちを聴く」が49%，「雰囲気をつくる」が48.9%，「言い残しの確認」46.2%の3項目であった（図８）。

５．成人看護学への関心別にみた比較

成人看護に関心がある学生の距離のとり方の比較を行なった。その結果，有意であったものは，「自己紹介・挨拶ができる」が関心の度合いによって有意な差がみられた（$p<0.05$）。

また，「心理的問題をアセスメント」について，成人看護に関心のある学生に有意な差がみられた（$p<0.01$）。

６．患者との対人距離に関して

患者との距離に関して思ったことを自由記述で求めた結果，「コミュニケーションだけが看護ではないが患者さんとの信頼関係を築く上で距離のとり方は，大切なことだと思う」や「受け持ち患者とのコミュニケーションは4週間あり，徐々にうちとけて距離を縮めることができた」「2年次の実習よりうまくかかわることができたと思う」「2年のときは，『患者のそばにいないといけない』という気持ちが強く患者のそばに居すぎた」「成人Ａでは自分の意識が変わって驚いた」「最初は戸惑うことがあったがいい関係がとれた」「意識障害のある患者さんだったので言語のコミュニケーションは眼や表情で少しできた」「日に日に距離のとり方を実践の中で学んでいけたと思う」「近づきすぎてもだめだと思った」「自分が１人になりたい時があるように，患者さんにも距離をおいて1人になりたいと思うことがあると知った」や「対話の距離観だけでなく心理的な距離観（テレビをみているのに邪魔しない，一人でいたい時など）も大切だと思った」と答えていた。

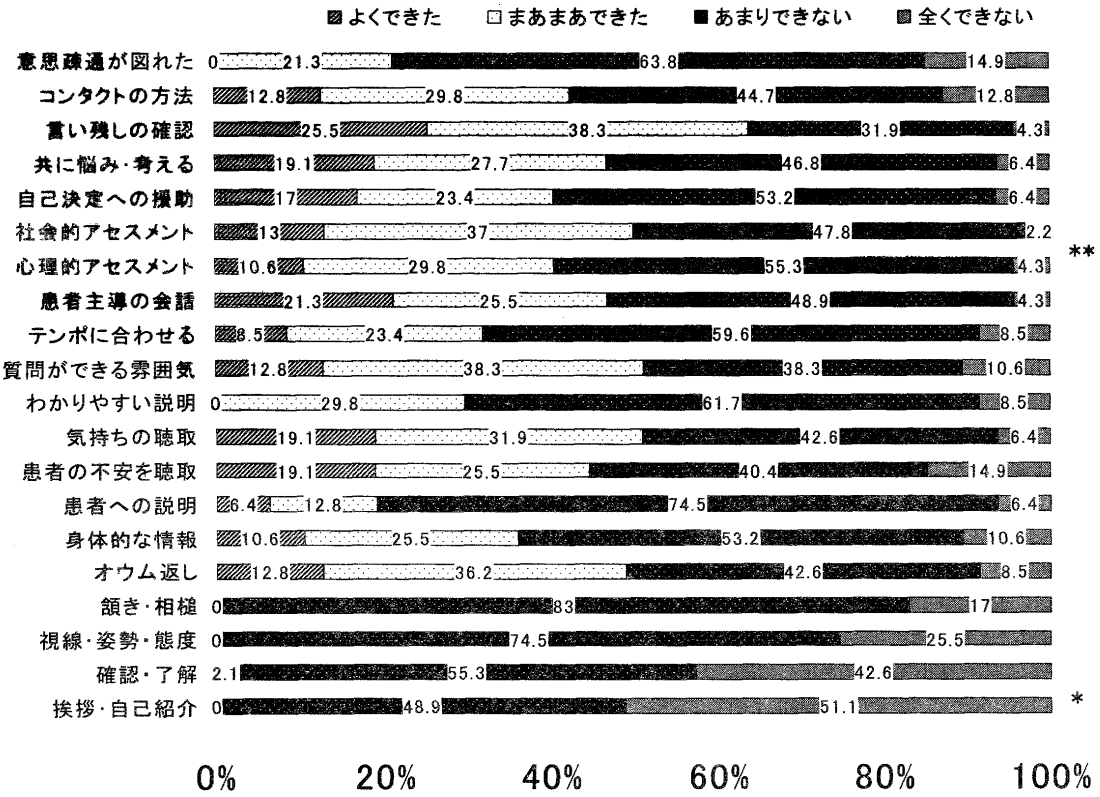

図８　患者との距離のとり方（**：$p<0.00$　*：$p<0.05$　n=47）

Ｖ．考察

成人看護学実習Ａにおける対人距離のとり方について，一部精神看護学実習[4]と比較しながら考察する。

１．成人看護学Ａ終了時の臨地実習の進度状況

3年次の実習開始から8週間が経過した段階で「老年看護学実習」「小児看護学実習」「地域看護学実習」を3割程度が終了していた。「精神看護学実習」と「母性看護学実習」は２割程度の進度であった。成人看護学実習Ａが終了する段階は全領域の2割～3割にあたり，学生の距離観に成人看護学実習Ａ以外の領域での実習が影響を及ぼしているとも考えられる。

２．成人看護学Ａ終了時の学生の意識

１）成人看護学実習Ａを終えた段階で「不安がある」と答えた学生は９割近くおり，精神看護学実習の場合（約８割）に比べると若干不安が強いといえる。成人看護学の前半が終了した段階でもかなり高い不安をもっていることがわかった。何に対するどのような不安なのか不明であるが，「これまでは，患者のそばにいないといけないという気持ちが強く患者のそばに居すぎた」や「近づきすぎてもだめだと思った」と述べていることから，多様で複雑な身体的・精神的・生活的状況にある患者と出会う中で、これまでの自分が身につけてきた看護観や看護技術を更新しなければならない必要性に迫られていることを、学生は「不安」と表現していると考える。

２）成人看護学実習Ａへの興味・関心については，約９割の学生が「興味・関心がある」と答えていた。精神看護学実習でも同様の興味関心度であった。学生は一方では「不安」を感じつつも、他方で成人看護学の重要性を理解し，成人看護学実習Ａに意欲的に取り組んでいる。そして、「受け持ち患者とのコミュニケーションは4週間あり，徐々にうちとけて距離を縮めることができた」や「最初は戸惑うことがあったがいい関係がとれた」と、４週間という長期間にわたる成人看護学実習Ａの過程で、患者との距離を意識し距離のとり方に注意を払いながら興味や関心をもって実習に臨んだと考えられる。

３）成人看護学実習Ａに対する学生の印象は，全員がよい印象を得ていた。精神看護学でも96.2%がよい印象をもっていたので，この傾向は成人看護学に限ったことではないといえる。このことは、成人看護学実習Ａにおいて学生たちの印象に悪影響を及ぼすような出来事やトラブルがなかったことを意味している。

４）成人看護学実習において患者との対応で指導者に望むことについては，まず何よりも指導・援助が必要なときに指導・援助がほしいということである。「困っているときの声かけや助言」と「症状の判断に迷った時の助言」が7割以上であった。その際の指導・援助は、「具体的な対応への助言」「カンファレンスでの助言」など、抽象的なものではなく、具体的な状況についての具体的な指導・援助であることも求めている。つまり，３年次における実習の初期段階であることを考慮して，学生に具体的で細やかな声かけや助言・指導がもとめられるのである。なお、「患者の情報提供」が5割程度求められているが、個人情報管理の問題と重なっており難しいところである。

３．コミュニケーションの対人距離

１）学生と患者のコミュニケーション時の位置関係では，「90度法」が約8割を占めていた。次いで「45度法」「対面法」「並行法」が１～２割であった。精神看護学実習ではこれと逆で「並行法」が５割を占め，「90度法」「45度法」「対面法」が共に2割に満たない状況であった。樋口[5]は90度法は対面法より近い距離で，少し関係がとれた患者の精神面に深く入るときに有効だと言われている。並行法は，患者との関係があまり取れていない時期に患者の内面に触れるとき有効だとされている。したがって学生は、成人領域では90度法をとり、常に患者に近づいていく姿勢で臨んでいたと考えられる。それに対して精神看護学実習では並行法をとることで、少し距離をとりながらコミュニケーションをとろうとしている。このように学生は、患者の状態に応じて適切な対人距離をとろうと努力していることがわかる。なお、このように位置関係はコミュニケーション過程に影響及ぼすものであるにもかかわらず、精神看護学実習以外では十分考慮されていない。今後の改善課題である。

患者との距離では，「50cm離れて」が７割、「１ｍ離れて」が2割弱であった。「20cm離れて」や「接触して」のように患者に近い距離は避けている。樋口ら[6]はコミュニケーションにおける対人距離は，心理的な影響によって変化し，「50cm開ける」は親密な関係だと述べているように、物理的距離は心理的距離に影響を受けるといえる。精神看護学実習では，「1ｍ離れて」は1割未満であった。この点から，成人看護学実習では距離をおき，精神看護学実習は近づいていく傾向があると考える。

１回の会話時間が「20分」4割，「30分」3割というのは、精神看護学実習でも同様であった。「20分」間というのは少し短いとも思えるが，「対話の距離観だけでなく心理的な距離観も大切だと思った。」と、位置や時間といった対話の物理的な形式だけではなく、心理的な距離観の重要性に気づき、より豊かな距離観を形成している学生もいた。

場所を見ると「病室」が9割で大半を占め，「ホール（面談室）」は1割に満たなかった。精神看護学実習の場合は「ホール（面談室）」が最も多く，次いで「病室」であった。これは，いずれも患者の生活行動に合わせた結果

だと考える。成人看護学実習の場合は患者の多くが「病室」で過ごし，精神看護学実習の場合は「ホール（面談室)」が療養の中心であったことから，学生は患者に合わせた場所でコミュニケーションを図っていると考える。

周辺の環境やその構成に対する意識は一番高い項目でも3割程度であり、概して周辺の環境に配慮できているとはいえない。実習初期ということもあって，患者との関係をつくることへの不安や対人距離をとることに気持ちが注がれて，患者との環境づくりにまでいたっていない。このような場合に，学生が指導者に望むことにあるように「困っているときの声かけや助言」「具体的な対応への助言」など適切な指導が必要である。

2) 患者との対応において適切な対人距離がとれたことによって6割程度の学生が「優しかった」「気づかってくれた」「協力的」であったと答えていた。患者からのこうしたメッセージは学生の意欲ややりがいに繋がり，患者とのよりよい対人距離を促し，コミュニケーションを高め，距離観を形成する手だてとなる。

一方，対人距離がとれなかったことで最も多かったのが「拒否された」「怖かった」「怒られた」「辛かった」などであった。実習初期でもあり，対人距離のとり方が十分理解できていない段階では起こりえる現象である。こうした学生に対して指導者は，学生と物理的・心理的な距離をとりながら学生の意欲や看護に対する思いを失わないように指導者として適切な対人距離をとるための支援を行なっていく必要がある。さらに，対人距離のとり方を省察させ、距離観を高めていくために、プロセスレコードなどを活用して患者との距離のとり方をリフレクションすることで自己を振り返る機会をつくる。これによって今自分が持っている距離観を自覚することができ、それを自分自身で形成していく学びができると考える。

また，わずかであるが「ボディータッチを受けた」ということがこの調査で判明した。これらのことに対しても，指導者として速やかに学生の状況や思いを聴き，対応することが求められる。表面化しにくい患者とのトラブルの多くが，患者に気を遣って学生のなかで処理されていると考えられる。指導者として学生が何でも言えるような受け入れ体制を整えることが急務である。いずれにしても，看護教員と臨床指導者が密接に連携をとり、学生や患者の安全を第一に見守り育てていく必要がある。

さらに、困った対応として，「言葉がわかりにくい」や「気をつかった」が3割を占めた。「うまく話せなかった」も「症状の判断に迷った」なども2割未満みられた。こうした状況に対し指導者が具体的な指導をすることが求められている。このような患者との対人距離のとり方に困難を抱えている学生が、適切な対人距離をとり、距離観を形成していくことに配慮して指導・支援していくことが求められているのである。

4．コミュニケーション過程における距離のとり方

成人看護学実習でのコミュニケーション過程の距離のとり方に関しては、「よくできた」と「まあまあできた」を合わせてみてみると，「挨拶・自己紹介」「患者の確認」「視線を合わす」「言葉かけ・うなずき」が4項目とも9割を超えほぼ100%であった。これらのコミュニケーション技法については実習初期であっても実践可能であったといえる。これまでに培った知識や技術を統合して患者との対人距離をとることができていると考える。

次に，「説明を理解してもらった」「意思疎通ができた」「わかりやすく説明」の3項目が8割程度、「テンポを合わせる」「患者の情報収集」が6割程度であった。これらの項目は，対人関係が一定程度確立してから成立するレベルである。それだけに実習初期においては低かったのではないかと考える。

「心理的問題をアセスメント」「自己決定を支える」「コンタクトの了解」「不安を聞く」「患者が主導」「共に考える」「オウム返し」「社会的問題をアセスメント」の8項目は5割にとどまった。これらは，さらに患者との関係が深まってから可能となる内容である。心理的問題や不安を聞く，共に考えるなど患者との心理的距離がとれなければ難しい内容であったと考える。これらのことを実習初期の段階で到達することを求めることは困難であるが、それに上限を決めることはできない。学生の可能性を期待しつつ，次ぎに発展できるよう動機付けることも大切であろう。

4割にとどまった「気持ちを聴く」「雰囲気をつくる」「言い残しの確認」の3項目は，精神看護学実習でも3割程度で同様に低かった。学生が患者に対して「言い残しの確認」ができるには一定レベルの距離観を形成してからでなければ難しいと考える。つまり、患者とのコミュニケーションを実践することを通して距離観を形成していくことが求められる。

5．成人看護学実習への関心別にみた比較

成人看護学実習に関心がある学生の距離のとり方について，有意であったものは，「自己紹介・挨拶ができる」が関心の度合いによって有意な差がみられた（$p<0.05$)。また，「心理的なアセスメントができる」についても，成人看護学実習に関心のある学生に有意な差がみられた（$p<0.01$)。これらのことから，興味・関心のある学生ほど「自己紹介や挨拶」ができ，「心理的なアセスメント」ができることがわかった。しかし，他の項目は興味や関心の度合いに関係なく全体的に関心度が高かった。

6．患者との対人距離に関して

患者との距離に関して思ったことで「コミュニケーションだけが看護ではないが患者さんとの信頼関係を築く

上で大切なことだと思う」や「受け持ち患者とのコミュニケーションは4週間あり，徐々にうちとけて距離を縮めることができた」「2年次の実習よりうまくかかわることができたと思う。2年のときは，『患者のそばにいないといけない』という気持ちが強く患者のそばに居すぎた。成人Ａでは自分の意識が変わって驚いた」「最初は戸惑うことがあったがいい関係がとれた」「意識障害のある患者さんだったので言語のコミュニケーションは眼や表情で少しできた」「日に日に距離のとり方を実践の中で学んでいけたと思う」「近づきすぎてもだめだと思った」「自分が１人になりたい時があるように，患者さんにも距離をおいて1人になりたいと思うことがあると知った」など実践を通して患者との距離のとり方を学んでいた。

７．今後の課題

本研究は成人看護学実習Ａを終えた段階での対人距離のとり方に対する学生の意識をみた。今後は成人看護学実習Ｂが終えた段階で調査を実施する必要がある。さらに，学生が他の領域の影響を受けない成人看護学実習における対人距離の取り方についてどのように学んでいるかの研究に取り組みたい。

謝辞

本研究の調査に協力をいただいた平成18年度入学の看護学科学生に心から感謝いたします。

文献

1）小野晴子，住野好久：精神看護学実習における学生－患者間の「距離」に関する研究．新見公立短期大学紀要，28，7－13，2007
2）種池礼子，岡山峰子他：パーフェクト　看護技術間マニアル－実践力向上を目指して－．照林社，15-20，2006
3）前掲書１）
4）樋口康子，稲岡文昭，南裕子監修，松本和歌子他訳：円滑なコミュニケーション．新臨床看護大系,精神看護学Ⅰ，医学書院，73-86，1986
5）前掲書４)
6）ウィーデンバック，Ｅ，著　外口玉子・池田明子訳：臨床看護の本質－再構成－.109-123,現代社，1969
7）ヒルデガード Ｅ.ペプロウ編，稲田八重子他訳：人間関係の看護論.医学書院，1996
8）田村由美:看護実践とリフレクション．第17回学術集会講演集，日本看護学教育学会，2007
9）池田紀子：看護基礎教育における人間関係・コミュニケーション教育の現状と課題．看護教育，医学書院，43(9)，2004
10）外口玉子：精神看護学〔１〕，精神保健看護の基本概念－人との距離の保ち方にとまどう－．医学書院，2004

A study of the distance between students and patients in "Adult Nursing Training A"

Haruko ONO 1), Junko KAKEYA 1), Yoshiko YAMAGATA 1), Hiroyo KANAYAMA 1), Fusae HENMI 1), Yoshihisa SUMINO 2)

1) Department of Nursing, Niimi College, 1263-2 Nishigata Niimi, Okayama 718-8585 Japan
2) Professor of the Graduate School of Education, Okayama University

Summary

The present study aims to examine students' awareness of the distance between a patient and a caregiver during adult nursing training, and improve guidance in practical training. We conducted a questionnaire survey of third-year students at the end of the "Adult Nursing Training A" class, and discussed the results.

In training sessions, the physical distance between patients and students was approximately "50 cm". Students communicated with patients for "about 20 minutes" on average in "patient rooms", and most of them used the 90-degree method. They were close to patients in terms of the psychological distance, commenting that patients were "kind", "cooperative", and "attentive". While all students demonstrated excellent communication skills for "greeting and self-introduction", "eye contact with patients", and "call/nod to patients" in training sessions, they needed advice on "how to talk or give advice to patients in trouble" and the "determination of conditions and symptoms" from trainers and clinical instructors (Instructors).

Some of their comments included their findings and raised awareness: "As the four-week training proceeded, the distance between patients and myself was getting smaller"; and "Patients, like other people, including myself, want to be alone once in a while. I recognized that it is sometimes important to maintain a certain distance between patients and myself". In guidance for training, it is important to encourage students to reflect on their findings and develop what they have learned.

Key words: Adult nursing training, Guidance for training, Distance, Relation between students and patients